

二松學舎 松苓會

東京支部報



二松學舎の魂

支部長 矢澤 喜成 (50期)

東京都支部会員の皆様、
明けましておめでとうござ
います。

昨年は、八月三十日の東
京都支部総会・講演会・懇
親会並びに十月二十五日の
文学・歴史散歩に多数の御
参加を戴き、深く感謝申し
上げます。

大学九段校舎に場所を戻
しての講演会では、佐藤晋
新学長に御登壇戴き、楽し

くも今後の為になる国際政
治外交の御話を伺う事が出
来ました。

また、文学・歴史散歩に
は、本学の卒業生でもい
らっしゃる五井信教授を御
招きし、大学での講義の
後、新宿二、三丁目やゴー
ルデン街を巡るという新趣
向で、雨の中乍ら懇親会迄
盛り上がりました。

扱、先日、矢澤は、平野



豊かさを見つめて生きる

顧問 井上 和男 (42文)

私の少年時代は海とともに
に在ったと言っても過言で
はない。春になれば山へ
行つて「いたどり」や「た
けのこ」を探り、海岸に行つ
て「あさり」や「あおさ」
を採取して魚釣りを楽しん
だ。魚の餌となるゴカイを
取り、約二メートルの竹を
切り、枝を落とした竿にテ
グスと釣り針をつけただけ
の簡素な仕掛けであつたが、

魚は面白いように釣れた。

また、夏が来ると友達と
海水浴を楽しんだ。泳ぐこ
とはあまりせず、岩の間に
居る二枚貝や「さざえ」に
しにな「などを採取しなが
ら遊んだ。

それから四十年後、私は
久し振りに郷里に帰り、海
に入つて驚いた。海岸線は
埋め立てられ、岩肌に群生
していた「あおさ」や「カキ」

光治松苓会会長に御誘い戴
き、神奈川県支部特別会員
の鈴木久子様の第宅に伺う
機会を得、御主人でいらつ
しゃる作家の故鈴木了三先
輩の書斎で、漢籍や稀覯本
等、先輩の蔵書を拝見させ
て戴きました。私淑する鈴
木先輩は、矢澤と同じく中
国の古小説が御専門で、そ
こでは「二松學舎の魂」を
感じ取る事が出来ました。

この魂を受け継ぐ者とし
て、本年もこの東京支部を
盛り立ててゆきたいと存じ
ます。皆様、御協力の程、
宜しく御願ひ致します。

は影を潜め、亀の手「や
「あらめ」(海藻)は見事な
までに姿を消していた。

戦後まもなく芋と麦の二
毛作からみかんの栽培に切
り替えられ、みかんへの消
毒が海岸線の生態系を破壊
してしまつたのである。

現在の我々は物質的に豊
かになつたと思ひ込んでい
るが、失われた美しき自然
が二度と返ってくることは
ない。

このように日々自然が破
壊されつつあつても我々は
物質至上主義への傾注をや
めない。



新春を寿ぎ 心よりお慶び申し上げます

東京支部役員一同



顧問	井上 和男 (42文)
相談役	菅根 順之 (24文)
支部長	矢澤 喜成 (50文)
副支部長	星野 優子 (42文)
同	大山由美子 (47文)
幹事長	片山 聖英 (50文)
監事	大淵 俊明 (50文)
監事	神本 一喜 (85文)
事務局長	中原 敬二 (62文)
常任幹事	畠山 幸治 (37文)
同	家永 修 (44文)
同	高柳 幸雄 (49文)
同	齋藤 祐一 (51文)
同	野口 明宏 (51文)
同	菅原 義博 (53文)
同	高橋 映子 (53文)
同	平井 領 (75政)
同	室伏麻里子 (76文)
同	矢田 祐樹 (84文)
同	荒屋 陽子 (85文)

令和七年度東京支部総会 常任幹事 高橋 映子(53文)

(記念講演会・懇親会) 常任幹事 野口 明宏(51文)



参加者集合写真

猛暑、酷暑が続いた八月も終わりの三十日(土)、今年度の支部総会が本学に所を戻し、一号館二〇一教室で開催された。出席数二十七名。来賓として松苓会から平野会長、河野千葉県支部長、網野神奈川県支部事務局長が、大学からは佐藤学長に陪席いただいた。司会は片山幹事長、議長は野口常任幹事が推挙され、議事進行役員改選期にあたり、支部規約に則って支部長以下、役員・新役員が承

認された(一面参照)。前年度会計報告、監査報告に続き今年度の活動案、予算案が示され、すべて承認。野口議長の快活で活舌良い進行により、滞りなく進み、三十分ほどで閉会となった。松苓会本部、隣県支部、

本学との連携・交流が今後も盛んに行われるよう願う一方、目前の課題は支部会員数をいかに増やしていくか、を再認識させられた。世代を超えた同窓の場の楽しさを未知未見の方々にお伝えしたいものだ。

その後、会場を二〇二教室に移し、記念講演が行われた。渡辺和則第十一代学長による口上の後、講師として登壇されたのは佐藤晋現学長。「日本外交の現状と課題」を演目に混迷度を増す世界情勢と日本の今について、核保有・核抑止、国防費、感情論、陰謀論をキーワードに図表、データをを用いてお話しいただいた。

求めれば容易く、あらゆ



総会の様子



佐藤晋学長

る情報を誰もが手にすることができると多様性の現代は価値観も個々さまざまだ。事実を教える学問ながら、現代は事実よりも感情が優先される傾向にあり、感情の処置を教える難しさを説かれる。シャツの袖をまくりあげて語る佐藤学長の姿に心は学生時代に戻り、学び思考する貴重な機会となった。(高橋)

懇親会

家永修氏の司会でしめやかに開催されました。場所は九段校舎13階ラウンジです。飲み放題、食べ放題の説明が中原事務局長からあり、畠山幸治氏の乾杯。いきなり勢いよく盛り上がりました。

千葉県の河野支部長がお礼の挨拶をされて、家永氏が参加者全員に近況報告を振られて、参加者全員のお話を聞くことができました。松苓会には元教員の方が多く、興味深い話をたくさん聞けました。しかし、皆さん話始めるとなかなか止まらな

い(笑)。

びっくりしたことに、佐藤晋学長が最後までお付き合いくださったのは頭が下がりました。ときどき中原事務局長に対して愛情溢れるやりとりを聞いていると親しみやすい方だなあとつくづく感じました。元学長の渡辺先生からの紹介ではとても優秀な方だと説明がありましたが、全然偉ぶらないし、ざっくばらんな本音をたくさんお伺いできました。

時間いっぱいまで参加者全員のお話を伺い、金井康氏の一本絞めで幕を下ろしました。(野口)

信頼の絆を結ぶ会 常任幹事 家永 修(44文)

千葉支部長の河野千津子氏より鄭重なる総会・講演会のご案内を頂き、千葉支部の会に参加しました。

講演会は元NHKの朽見行雄氏による「和紙と日本文化」という題で、とても興味深いものでした。懇親会では一気に打ち解けたのです。同じことが各支部の会にもあります。以前からの盟友知友の絆を強く感じるのです。

新宿文学・歴史散歩報告

副支部長 大山 由美子 (47文)



参加した皆さん

秋雨の十月二十五日、九段キャンパス三号館十四時集合、本学文学部五井信教授による「見どころ解説」講義開始。近代文学作品を読み解く上で、地理的な場所の理解と共に歴史的な軸も頭の中に入れておくことが必要とのご教示いただく。五街道の宿場や新宿駅周辺の簡略図を板書しての詳細な解説に、本日の散歩への期待が高まる。

九段下駅から都営新宿線にて新宿三丁目駅下車、太宗寺へ。境内入口では、高さ二六メートルの巨大な菩薩様がお出向かえ。漱石

幼少期の養子先塩原家、その裏手にあったのが太宗寺。「見どころ解説」でいただいた漱石の自伝小説といわれる『道草』主人公がこの菩薩様によじ登った描写部分の資料を再読。映画「セーラー服と機関銃」ロケで主演の薬師丸ひろ子氏も菩薩様に登るシーンがあったと先生より紹介あり。境内には、都内最大の閻魔像を祀る閻魔堂、額に銀製の三日月を戴く三日月不動像を祀る不動堂。自分の痛むところを地蔵にあてはめ、その部分に塩をかけて祈願する塩かけ地蔵が信仰を集めている。

正受院では、太平洋戦争にまつわる数奇な運命を持つ梵鐘「平和の鐘」、靖国通りに面する成覚寺では、江戸時代中期の戯作者狂歌師恋川春町の墓を参る。投げ込み寺とも呼ばれる成覚寺では、宿場で働く身寄りのない飯盛女達や行き倒れた旅人達の供養塔に合掌。雨脚強まる中、戦後の混乱期にできた闇市が起源というゴールデン街へ。三百軒近い店が所狭しと並ぶ。作家や映画、演劇関係者が通うことで知られる。私道である路地での写真や動画撮影は禁止とのこと。その後、飯田橋方面へ延びていた都電角筈線跡のモザイク状石畳を進む。大正時代に開通した路線は、一九七〇年に廃止となり、遊歩道へと転用整備されたそうだが、雨に濡れた石畳を抜けて、懇親会場へ向かう頃は、大通り沿いの歩道は大混雑。静かに過ごした散歩の時間から一転、大都会の人ごみに流されるように会場到着。懇親会の時間も楽しくなごやかな雰囲気で行進。雨の中二十名以上の方々とは体感した新宿の歴史と文化の旅、企画や運営に携わってくださった方々に心より感謝いたします。

次回もお楽しみに。



雨の中太宗寺へ向かう

〈参加者感想〉

五井教授とゼミ生の人柄にふれて

群馬支部 勅使川原 寛 (53文)

東京支部の文学・歴史散歩の講師が同期生の五井信教授ということで、群馬支部から参加しました。

我々53期は、卒業後も新宿歌舞伎町で飲み会をしていました。当時の行きつけは「みやこんじょう」、最近では「大陸」が会場です。全国各地に離れ離れになった仲間ですが、誰かが上京すると連絡があると、声をかけあって集まっているメンバーです。

まさにシン文学・歴史散歩

事務局長 中原 敬二 (62文)

今回の文学歴史散歩は、現役大学教授による「講義からの散歩」という今まで

は明るいうちでも感じるのとができました。

にないカタチで実施しました。五井ゼミの卒業生達や教授の奥様も参加していたでいて、様々な年代の人たちが集い、電車での移動中から盛り上がりつつありました。散歩は十五時位からの約一時間。ちょうど良い運動でした。新宿二丁目やゴールデン街の怪しい？雰囲気

五井教授のゼミでは、初年の歓迎コンパは吉原界隈で飲み会、二年目の卒業コンパが新宿二丁目界隈での飲み会というのが恒例だそうです。懇親会は残念ながら二丁目の店ではなかったのですが、五井教授の人柄か、卒業したゼミ生も参加して、今どきの学生の話聞きながら、我々の学生時代を思い出しました。楽しい文学・歴史散歩に参加させていただきありがとうございました。

特集

昭和一〇〇年―戦後八〇年―

〈区切りの年にあたり、思いを〉

永久平和を願う

常任幹事 高柳幸雄(49文)

の日があり、みんな喜んで覚えがあります。

昭和40年代までは、まだ戦前の教えが残っていました。私の小学生時代、教室で先生の話を聞かずに隣の子に話しかけたり、ちょっかいを出したりする子がいました。先生の何度目かの注意の後、教室の後ろに立たされました。さらにふざけて、廊下に出されるという始末でした。漫画のサザエさんに出てくるカツオのようでした。

小学1年生から給食があり、6年生が配膳を手伝ってくれて、毎日美味しく食事をとりました。3年生まで給食に脱脂粉乳がありました。アメリカから日本の子供の栄養補給のため、学校給食に提供され、昭和40年初めまで続きました。脱脂粉乳を飲んだ経験はあります。冷めた脱脂粉乳は私も苦手でした。また、現在の学校給食にご飯の日があることをご存知ですか。当時は毎日食パンでした。たまに揚げパンやソフト麺

戦中戦後を生き抜いた親の世代は、戦時中、中学生は学校単位で軍需工場や飛行場等に動員され、小学生は疎開したそうです。食料不足で満足な食事をとることができなかったとのことです。戦後も食糧難は続きますが、国民は必死に働き、高度成長をもたらします。ついに復興を成し遂げ、その後、日本は世界第2位の経済大国にまでなりました。お陰で国民の生活水準は上がり、安定した収入を得られるようになりました。ファミリーレストランが流行り出し、家族で外食する機会が増えました。日本の食は豊かになり、飽食の時代を迎えました。それは平和な時代が長く続いているからに他なりません。今、海外から多くの人々が来日し、各地で安心して日本の食事を楽しんでいます。

「日本国憲法」の「前文」に「われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすること」とあります。戦後八十年、平和が維持されてきました。美味しい食事がとれるよう今後も平和であることを願います。



1946年11月3日に公布された日本国憲法。

昭和レトロに魅せられて

監事 大淵俊明(50文)

最近「昭和一〇〇年」というトピックで「昭和」の時代の移り変わりを振り返ろうという取り組みがなされています。昭和元年からの一〇〇年間、戦争やバブル景気の発生と終了、新型コロナウイルス感染症など、様々な出来事によって非常に変化の大きな時代であったと思われまふ。現在はデジタル化が進み、利便性や効率性が重視される社会になっていると感じます。

私が生きた「昭和」は中期から後期の三〇年余りですが、その後平成・令和と母校「二松学舎」で過ごしてまいりました。学生時代、職員として「昭和レトロ」と呼んでも差し支えないアナログで温もりのある「昭和」の母校「二松学舎」を振り返ってみました。私が入学した昭和五十三年は、前年(昭和五十二年)の「二松学舎創立百周年」記念事業として様々な変化があったと後日先輩諸氏から伺いました。その一つが第一記念館・クラブ棟の新築です。第一記念館は、地下1階地上5階建てで図書館・武道場・体育館等が配置されましたが、入学試験時には工事幕に覆われていたため大学校舎の確認に迷ったと同期生から聞きました。また、入学式・卒業式とも九段会館で行われることになったのも私たちの代からのことでした。第一記念館は、新しい機器・機材が配置されていました。本館は正しく「昭和レトロ」で黒板と机・椅子しかないという世界でした。特別教室は和室(書道室)・L.L教室だけと記憶しています。狭いながらも四年間を同一キャンパスで先輩・同期・後輩と過ごせたことは幸せ



二松学舎創立百周年式典

海部俊樹文相などの来賓を迎えた、創立100周年記念式典(昭和52年)

業、母校に職員として奉職致しましたが、同年柏(當時は沼南)キャンパスが開設されます。ここから、九段・柏の2キャンパスが始まりました。後の九段集約まで2キャンパスが継続されました。

昭和以降、平成・令和と母校は発展を続けます。平成十六年に現在の1号館・2号館が完成し、その後、5号館まで開設されました。更に、令和において6号館の開設が予定されています。今後、母校の更なる発展を祈念いたします。

だったと感じています。昭和五十七年卒

「運命」を背負った校歌

常任幹事 齋藤祐二 (51文)

あなた変わりはないですか／日ごと寒さがつります

都はるみの「北の宿から」の冒頭である。昭和一〇〇年の、ちょうど半分が過ぎた年にヒットしたこの曲は、ショパンのピアノ協奏曲第1番のメロディーによく似ている。

というように、世のなかには、クラシック音楽を思い起こさせるような歌が少なからず存在する。これまでもあまり言及されてこなかったように思うのだが、二松学舎の校歌にも、うすうすそんなことを感じている。

来年(令和八年)、創立一〇〇年を迎えるNHK交響楽団(N響)は、早くからドイツ系の指揮者を招いてきた。そのため、ドイツ・オーストリア音楽を得意としている。同じく来年、没後二〇〇年を迎えるベートヴェンの楽曲も、看板レパートリーの一つである。昭和一〇〇年という時の流れのなかで、この希代の作曲家は、「楽聖」とし

て日本に定着した。N響の音楽活動が、その定着に大きく寄与したことは、疑いなくであろう。

さて、この「楽聖」の代表作の一つに、交響曲第5番がある。実は、二松学舎の校歌が、その第2楽章の第2主題によく似ているのである。冒頭の主旋律のみを示すと、①のようになる。原曲は3／8拍子であるが、校歌と比較しやすいように、4／4拍子に書き換えてある。②が二松学舎の校歌の冒頭である。

このように、出だしの3拍がリズム、音程ともに全く同じであり、演奏のテンポもほぼ同一と言ってよい。主和音の音を中心に、穏やかに進行する第2主題は、第2楽章で五回繰り返される。とりわけ、ささやくような木管群に続き、金管群が奏でるフレーズは、ファンファーレ風の莊重な響きをもつ。両曲に共通するのは冒頭部分のみながら、第2主題の曲想は、校歌全体の基調を成しているような印象を受ける。



① ② 校が依頼

ところで、二松学舎の校歌が制定されたのは、昭和一八年のことである。作詞は、岡山の落合高等女学校の教師新田貫一(第五回卒)によるもので、校歌制定委員会による補正が加えられている。作曲は、東京音楽学校とされているが、具体的な作曲者は不明である。戦後、新制大学への移行に伴い、現在の歌詞へと改訂されたものの、曲はそのまま受け継がれている。

明治の終わりがら、全国の学校では、校歌の作曲を東京音楽学校へ委託するようになった。東京芸大の大学史料室には、「作曲委託関係書」

しており、助教授の楠美恩三郎らが作曲をおこなっている。

同校が昭和二四年までに作曲した校歌などは、同関係書によると、およそ八〇〇曲にも及ぶ。ただ残念ながら、二松学舎からの委託書類は、残されていないようだ。

昭和一八年当時、同校で楽理や作曲を教えていたのは、信時潔、橋本國彦、平井保喜、細川碧などの教師である。とりわけ信時と平井は、多くの校歌を作曲している。

日独伊同盟が結ばれ、戦局が厳しさを増すなか、ドイツ音楽の王道たるベートヴェンの第5番「運命」から着想を得て、おそらく彼らのうちの誰かが、二松学舎の校歌を作曲したのであろう。

いずれにせよ、昭和一〇〇年を迎え、「世界の光」として「東洋の学」が継承され、「日ごと寒さ」がつるのことがないような「平和の御国」が続くなか、「運命」を背負った校歌は、これからも永く歌い継がれてゆくことであろう。

昭和一〇〇年と『細雪』

監事 神本一喜 (85文)

谷崎潤一郎の『細雪』は昭和一八年に『中央公論』で連載が始まった。作品の主題の一つは「日本美が減びゆくプロセス」だが、その日本美が時局にそぐわないとして軍部より連載を止められた。作中では蒔岡四姉妹が帯や襦袢・羽織などを丁寧に選ぶように、柄そのものより「選ぶ手間」という生活様式に結びついた美が描かれる。ただ、その儀式的な美意識は現代にも残り、朝のルーティン動画で家事や服選びを楽しむ姿に受け継がれている。しかし洗濯や服選びをAI洗濯機が代替し、体調データや気候データから最適な服を用意する未来も近い。AIによる価値観の転換は当時の西洋文化の流入に匹敵するだろう。つまり「日本美が減びゆくプロセス」が再生産されるのだ。昭和一〇〇年とは、AIにより多くのモノコトが代替されていく過程のなかで日本美を再発見すると同時に、またそれが減んでゆくプロセスを眺める、そのような視座となる。

二松学舎と「昭和時代」

常任幹事 菅原 義博(53文)

先日、知人が子供から「お母さんって、『昭和時代』生まれなの?」と言われたという話を聞いた。昭和に「時代」をつけると、やけに遠い昔に感じる。今の子供達は、我々が「江戸時代」「明治時代」「大正時代」と呼ぶ感覚で、「昭和時代」と呼んでいるのだなあと、妙に感心してしまった。それだけ昭和は昔になってしまったのかも知れない。昭和は「激動」というワードで語られることが多い。たしかに戦争があり、焼跡からの復興、高度成長へと移りゆく濃い時代であった。

そんな高度成長期の象徴が一九七〇年の大阪万博だった。当時小学校低学年だった私は行きたくても行けず、悔しい思いをしたのを覚えている。その万博が、偶然にも昭和一〇〇年を迎えた昨年に再び大阪で開催され、二松学舎も漱石アンドロイドを出展するという形で協賛することになった。各種メディアでも取り上げられたが、こうした昭和一〇〇年の記念すべきイ

ベントに二松学舎が関わることでできたのは、卒業生・関係者の一人として、非常に誇らしい出来事であった。さて、昭和が始まった一九二六年、二松学舎では何が起きていたのか。その年、二松学舎は専門学校の設立を計画し、舎長の渋沢栄一を中心に精力的にこれを進めていたという。昭和二年の創立五〇周年を経て、昭和三年、二松学舎専門学校が開設され、それまでの塾から国文・漢文の教師を養成する専門学校へと生まれ変わった。まさに、その後の二松学舎の特色を形造っていくための変化は、ちょうど「昭和」とともに始まったのである。

そして、一〇〇年。来年二〇二七年に二松学舎は創立一五〇周年を迎える。すでに学内では、これに向けた準備が始まっている。次の一〇〇年にはどんな未来が待っているのだろうか。



開校当時の全貌
（昭和6年）

時の流れと女性総理大臣誕生

常任幹事 平井 領(75文)

一九四五年七月、トルーマン、チャーチル、スターリンがポツダムで会談し、日本の降伏を求めるポツダム宣言を発表した。日本がこれを黙殺する一方、アメリカは八月六日広島に、九日に長崎に原子爆弾を投下した。同時にソ連はヤルタ協定にもとづき、日ソ中立条約を無視して、八月八日に日本に宣戦し、侵攻した。

八月一日、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏し、一日に天皇の玉音放送により国民にも明らかになった。

かにした。こうして数千万人が命を落とし、多数の難民と孤児をもたらした、史上最大の戦争は終わりを告げた。歴史上、数多くの戦争があったが、この第二次世界大戦は、異なる政治・社会体制間の優劣を競ったこと、アジア、太平洋地域が主戦場の一つになったことなどが特徴として挙げられる。

そして、核戦争の脅威となった。その一方で、民主主義の拡大や両性の同権化も大戦後に多くの地域で

次世代に伝えるべきもの

常任幹事 荒屋 陽子(85文)

昨年度、私は高校二年生の担任として修学旅行の引率をした。私の勤務校の修学旅行は一月の終わりの沖縄である。私を知る戦争は、「火垂るの墓」「硫黄島からの手紙」などといった映画や、社会科の教科書・資料集、テレビのニュースで流れたイラク戦争やウクライナ戦争などであり、身近なものとして受け止める機会

があまりなかった。

だから、昨年度は生徒と一緒に学び、貴重な体験となった。ルートは定番の、ひめゆりの塔、平和記念公園、旧海軍司令部壕、首里城、美ら海水族館。私の一番印象に残ったものは、旧海軍司令部壕とその近くにある糸数壕だ。沖縄の方言で「ガマ」と呼ばれる天然の洞窟で、避難壕や野戦病

実現された。そして、時は経ち、日本でついに憲政史上初の「女性総理大臣」が誕生。イギリス初の女性首相の故マーガレット・サッチャー氏の名言である、『リーダーは好かれなくてもよい。しかし、尊敬されなくてはならない』を目標にする日本の「鉄の女」に世界の注目も集まっている。戦後八〇年、昭和一〇〇年から年が明け、創立一五〇年へのカウントダウンが始まる我が学び舎二松学舎。柏と九段下の唐揚げカレーの味を懐かしみながら、またあらたな歴史を刮目せよ! アプリコットサークル最高!

院として使われたものである。実際に入ってみると、空気が生暖かく、自然光の入りにくい真つ暗な洞窟で、奥まで広がる穴はどこまでも続く深い闇のように思えた。命の危機がない現代ですら不安感を覚える空間に、当時の人々の恐怖はどれほどだっただろうと感じた場所であった。

終戦から八〇年。戦争の悲惨さや残酷さを次の世代にも身近なものとして伝え、恒久の平和を願いたい。

近代日本創設記①〈明治天皇〉

幹事長 片山 聖英 (50文)

近代日本を創設するため
に中心に据えられたのが、
「天皇」という存在である。

明治・大正・昭和天皇と
いう三代に渡って「誇るべ
き日本人の理想像」として
の天皇の姿が固定されてい
く。それを辿ってみよう。

応仁の乱以降、京都は静
まる間がなかった。

弘治三年（一五五七）年
十月二十七日に第一〇代
正親町天皇が踐祚（即位）。

織田信長を初め戦国大名
たちは天皇を敬う立場を
とっている。豊臣秀吉は天
皇家と親密な関係をつくり
たくて動くが全く認められ
ていない。その後、徳川家
康が天下をとると、逆に天
皇家より征夷大將軍に任ぜ
られている。

そして秀忠、家光の時代
となり、彼らは後水尾天皇
の出家後のための修学院離
宮の造営の費用を出してい
る。同じ頃、家光によって
日光東照宮が造営中であっ
たので、財力による権威の
平衡を保とうとする動きで
あったと分かる。

この後、十一代に渡り皇
位が継承されていくが、公
家諸法度などにより、天皇
家の地位は低いところに置
かれていた。

そして幕末を生きたのが
第一二〇代仁孝天皇と第
一二一代孝明天皇である。

仁孝天皇は幕末の情報
収集して学ぶために公卿の
子弟のための教育機関とし
て学習所を建てている。

この機関が後の「学習院」
である。

そして孝明天皇が十六歳
で踐祚して間もなく、アメ
リカのペリー提督やロシア
の使節プチャーチンなどが
来航、激しい勢いで開国を
迫っていた。まさに太平の
眠りを覚ます蒸気船に翻弄
される事態となっていた。

幕藩体制は弱体化し、崩
壊寸前であった。十四代将
軍家茂に皇女和宮の降嫁が
進められていく。和宮は書
簡に「天皇のそばを離れた
くない」という心情を訴え
たが、天皇家としての苦衷
を察して降嫁している。

その後、孝明天皇は慶応

二（一八六六）年十二月の
内侍所での神樂に出席して
風邪をこじらせている。二
週間後、三十六歳で亡く
なっている。『中山日記』
には「九穴より出血」と悲
惨な臨終の様子が記されて
いる。

この激動の時代に十四歳
で天皇になるのが明治天皇
であった。この継承劇に何
か妙な力が働いたように感
じてしまうのであった。

それまでの天皇は殆ど京
都から出ることなく、一生
涯を終えている。しかし明
治天皇は違っていた。明治
元年（一八六八）となる年
に大阪の天保山から初めて
海を見て感動している。

日本初の観艦式に参列。
現在も記念碑が天保山に設
置されている。この式を取
り仕切った肥前藩の砲艦電
流丸を中心に十六隻の群団
であった。その後方にフラ
ンス軍艦デュプレックス号
が続き、歓迎の祝砲を発射。
大きな音が海を渡って天



第122代明治天皇



昭憲皇后

保山に響き渡った。このと
き、明治天皇は新時代の到
来を実感したという。

新時代を迎え、それまで
は拝謁など望むべくもな
かった薩摩・長州・土佐の
下級武士たちが面会を許さ
れたのだった。

なかでも補佐役の大久保
利通と西郷隆盛には強い衝
撃を与えられている。堂々
とした西郷の姿は明治天皇
にひとつの憧れを抱かせる
ものであったようだ。

この後、誇るべき天皇を
創り上げるべく公務時間が
午前十時から午後四時まで
と取り決められ、学びとし
て教育係（侍講）が置かれ
たのだった。

日本を代表とする人物と
して天皇を据える案は岩倉
具視によるもので、明治
天皇に「王政復古の太号
令」を出させている。この
岩倉に多くの知恵を与えた
のが公家と同郷人であった
玉松操である。

玉松は「神武創業の古に
還れ」と訴えた。その周囲

にいたのが肥後藩の時習館
で学んだ元田永孚、井上毅
で、さらに津和野藩出身の
福羽美静と大國隆正がお
り、彼らにより神道政策や
廃仏毀釈が進められている。

福羽は親交のあった土佐
藩出身の鹿持雅澄が『万葉
集』の研究をして『万葉集
古義』を生涯をかけてま
め上げて亡くなったことを
知り、それを明治天皇に献
上している。

この研究書などを学ぶこ
とを通して、明治天皇は天
皇としての自信を得るもの
となっていた。それが紀
元節や皇紀二六〇〇年に繋
がるのであった。

また後に東大総長となる
加藤弘之によってドイツ政
治学が学ばれている。そこ
に補佐役の西郷隆盛の発案
によって漢字が学ばれ、西郷
亡き後、「教育勅語」の発布
に続くものとなるのだった。

ところが、昭憲皇后は子
室に恵まれなかった。側室
により、明治天皇は十五人
の子どもを設ける。しかし
殆どが幼少で亡くなり、女
子四人と男子一人のみが生
存という状況であった。こ
の男子一人が大正天皇とな
るのである。（次回に続く）

2024年度 二松學舎松苓会東京支部会計報告

自 2024年4月1日 至 2025年3月31日

(単位 円)

収入の部				支出の部			
科 目	予 算	決 算	差 異	科 目	予 算	決 算	差 異
会費	70,000	80,000	10,000	会報費	100,000	96,800	3,200
支部運営助成費	250,000	319,868	69,868	通信運搬費	200,000	103,231	96,769
雑収入		31,644	31,644	会議費	0	0	0
				総会補助費	30,000	73,500	△ 43,500
				振込手数料	7,000	6,704	296
				活動補助費	90,000	58,224	31,776
				交通費	20,000	18,714	1,286
				交際費	40,000	40,000	0
				慶弔費	20,000	0	20,000
				消耗品費	10,000	0	10,000
				予備費	10,000	0	10,000
小 計	320,000	431,512	111,512	小 計	527,000	397,173	129,827
前年度繰越金	564,012	564,012	0	翌年度繰越金	357,042	598,351	△ 241,309
合 計	884,012	995,524	111,512	合 計	884,042	995,524	△ 111,482

雑収入：他支部からの祝金、預金利子
金銭出納帳等を監査した結果、上記の会計報告に相違ないことを報告します。
2025年 8 月 30 日 監 事 大 淵 俊 明 ㊞

会計報告

2025年度 二松學舎松苓会東京支部予算

自 2025年4月1日 至 2026年3月31日

(単位 円)

収入の部			支出の部		
科 目	予 算	備 考	科 目	予 算	備 考
会費	80,000		会報費	60,000	支部報作成費
支部運営助成費	250,000	松苓会本部より	通信運搬費	120,000	会員への郵送料等
			会議費	0	役員会開催にかかる費用
			総会補助費	30,000	総会にかかる費用
			振込手数料	7,000	郵便振替他
			活動補助費	50,000	講演会謝礼文学散歩経費等
			交通費	20,000	役員交通費
			交際費	40,000	他支部祝金等
			慶弔費	20,000	
			消耗品費	10,000	宛名ラベル・文房具等
			予備費	10,000	
小 計	330,000		小 計	367,000	
前年度繰越金	598,351		翌年度繰越金	561,351	
合 計	928,351		合 計	928,351	

予算案

東京支部事務局から 事務局長 中原敬二(62文)

令和六年十二月から令和七年十一月までに年会費を納入していただいた方は次のとおりです。
感謝申し上げます。

松苓会東京支部は会員の皆様からの会費で運営しています。ご協力のほどよろしくお願い致します。

大山由美子(47文)
大 淵 俊 明(50文)
金 井 康 康(41文)
楠 山 愛(85文)
田 丸 勉(39文)
中 原 敬二(62文)

◆会費納入のお願い◆

年会費二千元 終身会費一万円（七十歳以上）

◎振込先 ゆうちょ銀行普通口座

(二シヨウガクシヤシヨウレイカイトウキヨウシブ) 記号一〇一七〇 番号四五八六九二一

今年度から支部報は年一回の発行になりました。松苓会東京支部では、会員の皆様からの情報を募集しています。伝えたい事や支部活動の感想など、何でも結構ですので、お気軽にご連絡ください。

連絡先 k-nakaha@nishogakusha-u.ac.jp(事務局長 中原)

編集後記

昭和一〇〇年、戦後八〇年という区切りの年にあたり、皆さんに思いを綴ってもらいました。

皆さんの原稿は幅広い視点で書かれてはいるのですが、そこに底流しているのは「戦争否定」「平和希求」「豊かさの本質」などを考えようとするものであることに気づくのです。

「あの戦争さえなかったら」と悔恨の情を訴える連続ドラマがあり、戦争というものの理不尽さに憤らざるを得ないのです。

今も戦争している国があり、一方的に権力者たちの欲望を通してするためにだけなされています。先に区切りの年と書きましたが、区切りを確認することは、これからの我々の在り方や行うべきことを確認することです。他者を理解することは本来、違いを知り、認め合うことです。その意味が地球上に行き渡る年となるよう願います。

◆発行◆

二松學舎松苓会
東京支部 事務局(中原)
電話 090・7941・5116